
最後の夢の幕引きを。

宮森すず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の夢の幕引きを。

【Nコード】

N7586I

【作者名】

宮森すず

【あらすじ】

KOOL番外編。（本編既読の方向けです）
大学生になった璃桜視点。

好きです。

好きでした。

夢が醒めて、わたしの恋は実らなかったけれど、ときおりあなたのことを想い返しては過去の自分を振り返っています。

わたしはどうしようもなく子供で、自分の感情に振り回されてばかりでした。

何も手につかず、ただ自分とあなただけが世界の全てであるかのように錯覚し、あなたもまたそうであるのだと信じて疑わなかったのです。

それが単なる思い込みであることに気づいたとき、わたしは自分の恋が恋で終わることを知ったのです。

わたしはその事実に打ちひしがれました。

その時の気持ちを言葉に言い表すことはできません。今でも思い出すことはできますが、どうしても言葉にはならないのです。

ただようやく、あなたが見ていた景色、あなたがいる世界、あなたが立っている場所が見えた気がしました。

わたしだけが本気だったのね。

わたしだけが夢を見ていた。

責めているわけではありません。

ただ知っていて欲しいのです。

わたしはいつも本気だった。

自分の気持ちに嘘をついたことは一度もなかった。

わたしが自分に正直であれたのは、あなたがわたしを守っていてくれたから。

今ならそれがわかります。

あなたがわたしの一番近くにいてくれたから、わたしはただの一

度も自分を偽ることなく生きてこれた。

だから今日は、今までのお礼が言いたいのです。

今までわたしの我が侘をきいてくれてありがとう。

いつもそばにいてくれてありがとう。

やさしくしてくれてありがとう。

ただ伝えたくて筆をとりました。どうか、迷惑でないといいのだけれど。

今朝、庭に初霜が降りました。

どうか、体を大切にしてください。

九条璃桜

璃桜、手紙をどうもありがとう。

自筆の手紙を書くのは久しぶりで、すこし緊張しています。

仕事もパソコンばかりであり文字を書く機会はなく、先ほどから書き損じて三枚ほど紙を無駄にしました。今度は上手くゆくといのだけれど。

どんな形であれ、どんな内容であれ、君からの手紙が迷惑であるはずがありません。

何度も読み返しています。

すこし、自分の近況を綴らせてください。社会人になってからそ

ろそろ一年が経とうとしています。仕事はようやく全体が見えてきたばかりです。自分に何が求めてられているのか、どこまでが自分の裁量なのかを見極めるために一年もかかってしまいました。

当然、大した権限などあるはずありませんが、仕事の進め方は比較的自由にさせてもらっています。正直に言ってしまうえば、それほど興味がある仕事内容ではないのですが、興味があるうとなかろうと、仕事である以上、効率的に行おうとする意思が働くようです。このような小さな発見をする度に、君に話したいという欲求を感じています。

職場では一番年下なので、まるきり子供扱いを受けています。もちろん自分がまだ成人もしていない子供だという自覚はありますが、今まであまりそういう扱いを受けたことがなかったので、すこしくすぐつたいです。

例えば、部長は出張のお土産を配る際、わたしだけ先に選ぶようにおっしゃったりするのです。笑ってしまうような話ですが、本当です。パートの方は午後三時になると、わたしのデスクにお菓子を置いてくれます。自分の娘の話を聞かせてくれることもあります。わたしがなぜこんな風にとりとめもなく日常の細々としたことを書いているかというと、君の近況を知りたいからです。

大学はどうですか。

友人はできましたか。

ご両親とは、けんかしていませんか。

勉強は楽しいですか。

わたしには知りたいことばかりです。

同時に、知らないことばかりだったことを、君の手紙から知りました。皮肉なことです。

君の手紙の中で、一つだけどうしても訂正してもらわなければな

らない箇所があります。

わたしには、君とわたしが同じ世界を共有していたと証明することはできません。

けれど、わたしはいつも本気だった。君の夢が醒めたというのなら、わたしは未だ夢の中にいるのでしょうか。

だったら一生、醒めてくれるなと祈るばかりです。

君とは物心ついた頃からの付き合いだから、もう十年以上ずっと一緒にいたはずなのに、こうして改めて礼を言われるとおかしな気分です。

なぜか、どういたしましてと素直に返せない自分がいます。

それは、君のありがとうが別れの言葉のように感じられるからです。

わたしにはもう少し、君の礼の意味を考える時間が必要なのかもしれません。

最後になりましたが、どうかご両親にくれぐれもよろしく。

君の手紙を鞆の中に入れて、しばらくはお守り代わりにします。

咲也

さっちゃん、お元気ですか。

先日は感情的なお手紙を差し上げてしまってごめんなさい。お返事をもらえたことに甘えて、こうしてまた、返信をしたためていま

す。

今日は近況を書こうと思います。さっちゃんが聞いてくれるなら、わたしは隠すべき事柄も感情も持ち合わせてはいません。どうか誤解しないで欲しいのですが、わたしは誰に対しても平等にプライヴァシーを放棄しているわけではありません。ただ、さっちゃんには隠し事をする意味もないし必要もないと感じているだけです。

大学は面白い場所です。変な方たちが大勢います。先生方の中にさえ、大学という社会にしか適合できなさそうな方がいらつします。これは悪口ではありません。わたしの正直な感想です。

お友達もできました。皆さんとても良い方ばかりですが、わたしがどなたともお付き合いしていないと申し上げたら、こぞって色々な方を紹介しようとするのだけは閉口してしまいます。

善意はうれしいですけど、わたしはどなたとも親密なお付き合いをするつもりはないのです。そう申し上げたらわかって下さいました。

今では、わたしには海外にフィアンセがいるという話に落ち着いたようです。

わたしも最近では、声をかけてくる方には「フィアンセがおりますので」とお答えするようにしています。呆れている？ さっちゃん。

けれど、すべてが嘘というわけでもないのです。

わたしは真実、心に決めた相手がいます。今はわたしの片思いですが、生涯片思いかどうかは神様にだってわかるはずはありません。これがわたしの出した答えです。

ですからどうか、先日さしあげた手紙は破り捨ててください。その代わりの今日の手紙を持っています。

さっちゃんが進学しないと決めたとき、わたしはあなたにずいぶん酷い言葉を浴びせました。就職が決まったときもお祝いの言葉ひとつなく、別れの日には見送りもしなかったわたしなどもう友達ではないと言われる覚悟でいました。本当よ。

同じ嫌われるなら、言いたいことを言って、それですべてお終いになればいいと思いました。だから感謝の言葉は同時に恨み言であり別れの挨拶であり強がりであり言うべき正しい言葉でした。

いつかさっちゃんは、わたしの素直さが美德だと言ったことを覚えていますか。

わたしはもう少しで、わたしの唯一の長所を手放すところでした。わたしは自分を偽ることはしません。さっちゃんがそばにいない生活は寂しいです。

どんなに仲の良い友人ができて、わたしの親友はあなただけです。

あなたを思う気持ちは日増しに強くなるばかりです。

十日後に学園祭があります。
もし良かったらいらして。

九条璃桜

璃桜、手紙をありがとう。

君の言う通り、前回もらった手紙を持ち歩いています。最初の手紙はどうしても捨てるのができなかったので、鍵のかかる引き出しに仕舞いました。

まず始めに学園祭にお邪魔できなかったことを謝らせて欲しい。運悪く仕事が忙しい時期と重なって、休日をとることが出来ませんでした。せつかくオケのチケットを同封してくれたのに無駄にしてみました。

君は聴いた？ プログラムが君の好きなモーツァルトとハイドンだったから、楽しめたといいのだけれど。

今日は雪が降っています。

雪の日は、なぜかラフマニノフのヴォカリーズが頭の中で流れます。昔、雪の日に君が鬱々と弾いていたピアノの音です。

君は昔から、雪が降ると短調の曲ばかり弾いていたよね。中でも、ラフマニノフのヴォカリーズは一際美しい旋律でした。だからわたしは雪の日が楽しみだった。

今日も弾いていますか？

忙しい時期は一段落して、今は年末年始に向けての最後の調整に入っています。この休みには久しぶりに実家に顔を出して、それから、君が許してくれるなら、君のご両親にもご挨拶に伺いたいと思っています。

大学での話を聞かせてくれてありがとう。高校とは大分雰囲気が変わったね。

どこにいても君が君らしさを忘れていないことに安心しました。君にフィアンセがいたことは初耳ですが……ごめん、書いてから後悔した。

君の片思いの相手とやらは、本当にどうしようもない。

もう迷うことはないと思っていたのに。

君の筆跡を見ると、君の声が聴こえる気がします。

わたしには今更すべてを壊すことはできません。

君のため、だなどと卑劣な言い訳はしません。これはわたしが望んだ結果だからです。

それなのに、手紙をもらえばこうして返事を書いてしまう。

君の気持ちを嬉しいと思ってしまう。

わたしの親友もまた、君だけです。

寒いので暖かくしてください。

そばにいらなくても、いつも君のことを想っています。

咲也

メリークリスマスです、さっちゃん。

今日はこちらも雪です。積もることはないだろうけれど、さきほどからちらちらと舞っています。

今は大学のピアノの練習室でこれを書いています。ご期待どおり、ヴォカリーズです。でもこの曲はひとりで弾くには悲しすぎてよくありません。だれかがそばで聴いていてくれないといけない曲です。そのだれかが「悲しくて綺麗な曲は、幸せな人間に弾かれなければ救いがないね」って言っていました。覚えていますか。

我が俣を言っている自覚があります。
でもどうしたらいいのかわからないの。

サンタクロースにお願いしてみます。
わたしの一番欲しいものをください、と。
朝目が覚めて、さっちゃんがいてくれたら、わたしは世界で一番
幸せです。

そこまで書いて、璃桜は壁の時計を見た。そろそろ午後十時にな
ろうとしていた。楽譜と書きかけの手紙をしまい、コートを手に練
習室を出る。正規のピアノ科ではない彼女は、いつもこの時間には
練習を切り上げる。

廊下には色々な音がすこしずつ混じり合いながらこぼれていた。
白い海岸で見つける白い巻貝のように、断片的なメロディの残骸が
聴こえてくる。

いつもと同じ一日の終わりのはずだった。室内楽のトリオとすれ
違った時も、璃桜は「まさか」と自分の儚い期待を打ち消した。

「何科だろう、うちの学校かな。初めて見る人だったね」

「誰を待ってるんだろね、今日クリスマスだもんねっ」

「めちゃくちやかっこよかったねー。綺麗っていうか、雰囲気があ
つてさあ」

三人組は璃桜の心を混乱させたことには気づかず、そのまま練習
室へと入っていく。

「九条さん、今帰り？」

次にすれ違ったのはスクールオケのコンミスだった。いつも飄々

とした彼女が珍しく上機嫌を隠しもせずに声をかけてきた。

「ちよつといいもの見たからね」

ふふふ、と笑う。「入り口のところにつごく綺麗なコがいたんだよ。女の子だと思うんだけど、背が高くて大人っぽいコ。クリスマスだから恋人を迎えにきたのかしら。学生証持ってないみたいだから、ドア開けてあげて、中で待ったらどうですかって言ったんだけど……」

璃桜は最後まで聞かずに走りだした。後ろから呼ばれた声に返事もせずに、エレベータを待つ時間を惜しんで階段を駆け降りる。

「まさか」と思う気持ちを止められない。同時に「駄目よ」と言い聞かせる。違っていたらきつと立ち上がれない。心なんて簡単に粉々になってしまう。それをひとつひとつ拾い上げてつなぎ合わせる作業がどれほどの苦痛を伴うか。

わかっていただけれど体も心も理性の言葉なんて聴こえていなかった。

「お願い」

その言葉だけが頭の中でぐるぐる回る。螺旋力ノンのように音階を駆け上がる。

お願い、と璃桜は誰かに祈った。目に見えない誰かに心の底から祈った。

もつれそうになる足を叱咤して、ホールを抜けるとエントランスがある。

（お願い……お願い……）

人影があつた。

コートを着た背中が。

呼ばれたように振り返ろうとする。

その体が完全に正面を向く前に、璃桜はその雪に濡れた肩に腕をまわした。勢い余ったせいで体が揺らぐ。それをなんとか踏みとどまって、抱きとめた相手は、

「危ないよ……」

控えめな抗議を耳元に囁いた。ほぼ一年ぶりに聴く生の声の刺激は強烈で、璃桜は壊れそうな自分の心臓の音を聴いた。体という楽器を通して鳴るこの音を、自分がどれだけ望んでいたか、どれだけ愛しく懐かしく想ったことか。

コートからは冷えた外気と雪の匂いがした。少し湿った髪からはベルガモットの香りが。なぜだか大声で泣きたいような気持ちだった。

「メリークリスマス」

相手は璃桜を引き離すことを早々に諦めたのか、そんな挨拶をした。

「会いに、来ちゃったよ」

困ったような照れたような、そして少しだけ切ない声だった。かすかに、苦笑する気配がコート越しに伝わってきた。冷たい手のひらがぽんぽんと璃桜の背中をなだめるように撫でた。

「ど、して……」

「ヴォカリーズを聴きに、かな」

「うそ」

「本当」

「……」

「カオ、見せてくれないの」

璃桜はおずおずと肩にまわしていた腕をほどき、そのままコートの前へすべらせた。胸に手をつく形で向き合い、ゆっくりと顔を上げた。

夏木はまっすぐに璃桜の目を覗きこんできた。瞳の中に自分の顔を見つけ、今、彼女の心と視界を独占しているのだという自覚が実感に変わると、ふいに恥ずかしさが込み上げてきた。

夏木の目にはどんな風に映っているのだろうか。どう思っただろうか。がっかりされていないだろうか。

そのどれもが璃桜には初めての感覚だった。

さっちゃんは、一年でますます大人っぽくなった。綺麗になった。

わたしは、子供っぽく見えるのではないかしら。そんな羞恥が璃桜を身じろがせた。

夏木は璃桜の反応に、一步だけ距離を空けた。違うの、と言いたくて言葉を探したが結局口をつぐみ、璃桜は口元にかろうじて微笑を浮かべた。

「泣きそうな顔してる」

夏木はそつと手のひらを璃桜の頬に添えた。手袋をしていない手の温度によやく我に返る。

「さっちゃん、いつからここにいたの」

「え、と」

「嘘をついたら許さないわ」

「い、ち時間」

「……」

「半、かな」

無言の圧力に屈して夏木が困ったな、と呟く。

「風邪をひいてしまうわ」

「大丈夫だよ」

「さっちゃんのバカ」

「……うん」

「ヴォカリーズ聴かせてあげる。いくらでも弾いてあげる。だから今はそばにいて」

閉ざされた空間に短調の旋律が満ちている。

幸せな悲しみだ、と璃桜は思った。

心が揺れないわけではない。言いたいことが多すぎて、本当に大切なことは何ひとつ言葉にはできない。

「夢みたい」

たった一言、口にできたのはそんな言葉だけだ。

「夢はいつか醒めるよ、璃桜」

「ちがうわ。わたしはもう、夢から醒めているの。夢にしまい

たいと願っているのはさっちゃんよ」

音はやまない。

雪のように積りもせず、雨のように流れもせず、ただ静寂の中に消えてゆく。

「……だいすき」

音にまぎれて告白する。

好きです。

好きでした。

今でも、ダイスキ。

どうしたら伝わるのだろうか、と璃桜は考える。言葉では足りない気がした。

「さっちゃん」

手を止めて振り返る。指先だけで、来てと呼ぶ。やさしい顔だ、と思った。

心情を読ませない、完璧な、自制と理性のヴェールをまとった顔だ。

そんなもの、と思う。

「……剥いでしまいたい」

近づいた腕を引き寄せて、意味を問いただそうと薄く開かれた唇に唇を押しあてる。

「り、……っ」

肩を押し返されて、接触は一瞬。かすめるような合間に万感を込めた。

ヴェールの隙間から、傷ついたような顔がちらりと垣間見える。もう一度覗きこもうとしたら、ぎゅっと抱きしめられた。

「さっちゃん……？」

胸に抱かれて顔は見えない。顔を見られたくないのだ、夏木は。「璃桜」

「はい」

「一度しか言わない。君のことが好きだよ。でもそれ以上に君のことが大事だ」

「……はい」

ああ、自分は今振られてるんだ、と璃桜は思った。
「だから応えられない」

ずいぶん長い時間が過ぎたような気がした。
時計の長針が六度かたむく。実際には、たったそれだけの時間でしかなかった。

今日はこれを渡しに来たんだ。そう言って夏木はピアノの譜面台の前に小さな小箱を置いた。開けてもいい？ と璃桜は聞いた。

あとでね。

そう言って夏木は笑った。

元の端正な彼女に戻っていた。大人びて、理知的で、やさしくて、残酷な。

璃桜は礼を言って微笑んだ。

泣き顔ではなく笑顔で。理屈ではなく気持ちで。言葉ではなく行動で。

証明したかった。

とつくに夢なんて醒めてる。

夢が覚めても、あなただけが好きです、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7586i/>

最後の夢の幕引きを。

2010年10月28日03時47分発行